

サラボルサ図書館などの経験を通して、図書館のコミュニティ・ハブとしての可能性を聞く



写真1 インタビューの様子

訪問日 2019年11月4日

記録者 古賀誉章

1. アントネッラ・アンニョリ氏の経歴について

アントネッラ・アンニョリ (Agnoli Antonella) 氏は、1952年セルヴァ・ディ・カドーレ生まれ。現在はボローニャ在住。1977年ヴェネツィアのスピネアにこどものための図書館を開館させ、2000年まで館長を務める。2001年から2008年まで、学術部長としてペーザロの新図書館「サン・ジョヴァンニ」の計画・実現に携わる。2011年からボローニャ市図書館協議会理事。近年、パブリック・スペースの環境づくりから公共サービス、司書教育に関するアドバイザーとして、ボローニャ「サラ・ボルサ」、グッピオ「スペレリアーナ」、フィレンツェ「オブラーテ」、ピサ、チニゼッロ・バルサモなど、数多くの図書館と協働しており、ロンドンの「アイデア・ストア」ではこども部門も担当した。2017年よりレッツェ市長補佐官（文化政策担当）として、図書館を基点とした町づくりに尽力。著書に『子どものための図書館』（ビブリオグラフィカ、1999年）、『知の広場』（ラテルツァ、



写真2 アントネッラ・アンニョリ氏近影

参考文献

- 1) アントネッラ・アンニョリ著、萱野有美 訳：「知の広場 図書館と自由」、みすず書房、2011年5月
- 2) アントネッラ・アンニョリ著、萱野有美 訳：「拝啓 市長さま、こんな図書館をつくりましょう」、みすず書房、2016年4月

2009年／邦訳：みすず書房，2011年），『拝啓，市長さま』（ビブリオグラフィカ，2012年／邦訳：みすず書房，2016年）などがある。（著書プロフィール等から抜粋）

2. サラボルサ図書館について

Q：サラボルサ図書館はどのような図書館か？

『知の広場 図書館と自由』にも書いたように，1990年代から2000年くらいにかけて，図書館について新しい動きが起きてきた。それは，本以上にそこに来る人を大事にする，という考えである。図書館をこれまでのような本を入れておく場所ではなく，人が居て心地よい場所であるように作ろうとした。そして，それらの多くの事例が，ただ図書館としてというより，一種のコミュニティ・ハブのようになり，その地域の地域開発の一部として活かされている。

Q：サラボルサのような図書館は古い大学・本・学問という特色のあるボローニャだから可能だったのか？

サラボルサ図書館が唯一のすばらしい事例なのではなく，イタリアの大きなまちには大概古い図書館がある。つそして，そこに新しく図書館を作るときには，古くて使われていない建物がこの国にはたくさんあるので，それを活用しようという話になる。サラボルサはそういう事例のひとつだと言える。他にその頃に関わった事例としては，ペーザロ Pesaro（マルケ Marche 州北部の都市），フィレンツェ Firenze，チニゼッロ・バルサモ Cinisello Balsamo（ミラノ Milano の北の郊外）などもある。ボローニャの場合は，ボローニャ大学のウンベルト・エーコ（小説家）らがコンピュータ・情報工学の研究所を計画していたので，それならば市民のための図書館をつくらうと提案したことから，このようなプロジェクトになった。

3. 市民のための図書館であるには

Q：ワークショップなどを通して，時間をかけて話して



写真3 「知の広場 図書館と自由」表紙

（みすず書房 HP より）

※ 2017年12月発刊の「新装版」は表紙が異なる



みすず書房

写真4 「拝啓 市長さま、

こんな図書館をつくりましょう」表紙

（みすず書房 HP より）

いくのが大事と思うが、市民のニーズをまとめていく工夫として重要なことは？

最近まで南イタリアのレッチェ Lecce (かかとの位置にあるコムーネ、古代ギリシャ以来の古い歴史のある都市)の文化部長を務めていたが、そのときの経験を話そう。イタリア南部は図書館においては非常に遅れていて、レッチェは人口10万人ほどの町にも関わらず図書館がひとつもなかった。図書館はいまだに、研究者のための場所と思われていて、一般人にとっては敷居が高く魅力がない場所である。加えて、イタリアの最近の人たちは本当に本を読まなくなってきた。

1) 参加者とワークショップの導入について

レッチェのプロジェクトで、ある地域でしかできなかったが、ワークショップをするために、その地域の各種市民団体の人ではなく、まず個々の自由な個人の参加を募った。市民団体からの参加者は、ある意味ではその団体の利益代表になってしまうので避けた。このとき、どんなワークショップをしたかという、市民参加型の取り組みでは、最初はある程度誘導しないとアイデアが出なくて困るので、第一段階では、まず世界中のいろいろな図書館で行われつつある活動・取り組みの事例やビジョンをレクチャーした。もうひとつは、サードプレイス(家でも職場でもない、自由に行けて時間を他の人と共有できる場所)という概念があるが、本当に人の居やすい場所はいわゆる公共施設の中ではなかなか生まれにくく、どこかで自然発生的に生まれてくる場合が多い。そこで、こういった場所だと居心地が良くて自由な活動がしやすいのか、ということを実例を挙げながら話した。

そこから、だんだんと地域のニーズに合わせて問題を一緒に考えていった。南イタリアでの一番大きな問題とは、文化を大事にしない貧困さだ。お金のあるなしとは関係なく、こどもを育てる上で教養は要らないという考えの人がかなりいる。関連して、「機能的文盲」の問題がある。これは、学齢期には普通に読み書きは勉強してきたが、大人になって本を読まないために、文章が理解できなくなる状態を指す。また、新しいテクノロジーから切り離されているために、情報から隔絶されている人もいる。



写真5 サラボルサ図書館の吹き抜け

1階の床はガラス張りで、地下にあるローマ時代のアゴラの遺跡が見える。

2) 散歩：身体化のプロセス

次に参加型プロセスの第二段階として、一緒に散歩を実施した。図書館の予定敷地に向かって市民と一緒に歩く。実際に現地に行くことでリアリティをもって、何をしたい・できるのイメージを持つようになる。

歩いたあとに、ここで何がしたい・どうやって過ごしたい、というワークショップを大人とこども相手に実施した。こどもは自発的に意見をドンドン言ってくれて充実したワークショップになった。一方で、大人には、話し合いのコンセプトとして、一緒に何かをするとはどういうことなのか、そこから何が生まれてくるのか、どうやって知らない人を惹きつけられるかを考えてもらった。専門家に頼むのではなく、市民と一緒に考えた。

4. 最新の図書館像について

Q：開館して20年近く経つが、今のサラボルサ図書館をどう思うか？

もっとどんどん革新していくべき。サラボルサ図書館ができたときにはイタリア初のメディアテックだったが、それからだいぶ時間が経っている。ICT技術の革新は速く、2001年にできたときですら、すでに中身が古くなっていた。こういうタイプの図書館は、社会のニーズに合わせて変わっていくべきだが、今では非常に遅れていると感じる。ただ、市街地の中心であり市民の集まりの中心となるマッジョーレ広場に面しているという立地に助けられて、たくさん利用されているが。

この間の変化として影響が大きかったのは、3階にあったアーバンセンター（都市の将来プロジェクトを研究・発表する場）が、より重要なものになって、規模的に発展してサラボルサの外に出てしまったことだ。本当は、図書館自体がそういう機能をもつべきなのだが、一番大事な機能が抜けてしまった。

実は、来る人を大事にする図書館づくりというフェイズはそろそろ一旦終わって、新しく次の段階に入るべきだと思っている。そこで、2つの新しい図書館を紹介したい。

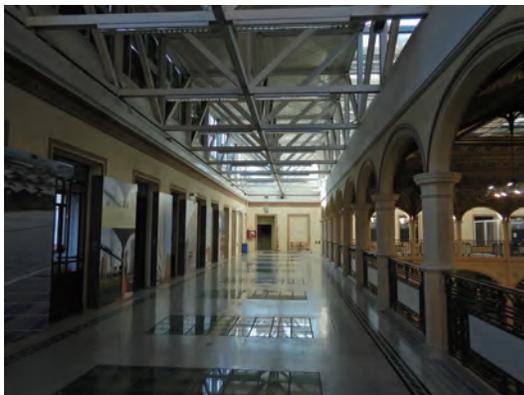


写真6 最上階にある、撤退したアーバンデザインセンターのあと

撤退したアーバンセンターのあった廊下と部屋。アーバンデザインセンターは隣の建物の改修とともに移転した。(写真は筆者)

Q：ひとつめは？

ひとつめは、デンマークのオーフスにあって2015年に完成した「ドック (dokk)」という図書館と市民センターが一緒になったような施設である。ドックができたことがきっかけでオーフスは2017年のヨーロッパ文化首都に選ばれている。

ここは、10年以上かけて市民参加型で作ってきた場所で、かつ大学の協力もとても大きかった。例えば、インテリジェンスな本棚システムを従来の図書館で試してからドックに採用したり、巨大な地下駐車場に電気自動車をたくさん揃えて市民が自由に借りられるようにした。またこの施設は港湾地域の再開発の核として位置付けられ、多額の補助金が投入された。

また、図書館としての特徴は、カウンタが受付以外ほとんどないところで、図書館員はずっと歩き回って利用者を助けていて、奥でじっと座っている職員はほとんどいない。この事例は単に図書館と言うよりはコミュニティ・ハブ、いわゆる市民センターである。ここでは、市民が必要なあらゆる情報を得ることができる。例えば、市役所や公民館などでできるパスポートや免許の作成や更新などもできるようになっている。また、お年寄りでコンピュータが使える人には助けるスタッフをつけるなど、利用者を助けるしくみができている。

建物もすばらしく、一番の特徴は各場所が非常にフレキシブルで、時間ごとにいろいろなことに使われる可能性がある。設計者は、コペンハーゲンのブラックダイヤモンド（王立図書館、1999年）を手がけたグループ（シュミット・ハマー＆ラッセン）である。選定方法はコンペだったが、なぜ彼らが勝てたかという、自分たちの作ってきた案を市民と一緒にいくらかでも直していくという、融通が効く姿勢が評価された（普通は当選案のまま設計する）。先ほど述べたように、見えないところの準備に時間をかけて作られた事例である。

Q：市民センターが図書館と一緒にある必然性・意味・メリットは？

本を読むだけならタブレットで済んでしまう。本を貸すだけなら、もう図書館はいらない。そんな中で、なぜ



写真7-1 オーフス公共図書館 Dokk1

公式HP：<https://dokk1.dk/english>

写真はすべて、Dokk1の公式プレスフォトより
(<https://dokk1.dk/press-requests>)

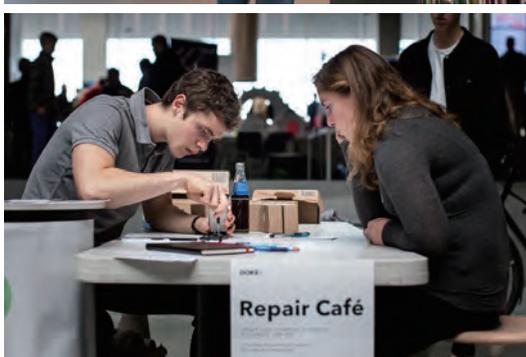


写真7-2 オーフス公共図書館 Dokk1

公式HP：<https://dokka1.dk/english>

写真はすべて、Dokk1の公式プレスフォトより

(<https://dokka1.dk/press-requests>)

今でも図書館をつくるのかというと、他の人と実際に会う場所、会うだけでなく他の人となにかを一緒にする（活動を共有する）場所だからである。例えば、イギリスのナショナルギャラリーは収蔵品を全てデジタル化しているのに、人々がわざわざそこに行くのは、「そこ」に何か意味があるからだろう。建物をつくること以前に、市民が一緒になって活動する場所をつくることに意味があるのか、そこから考えていくことが大事だと思う。

また、お金が一切かからずにいられる場所、あらゆる市民を同等に受け入れられる場所だからでもある。例えば、職安に行くというと、仕事がないかっこ悪い人、社会から脱落した人というイメージがあり、恥ずかしくて躊躇してしまう。そこで、もし職安が図書館があれば、差別感を受けずに行くことができる。図書館はニュートラルな場所で、民主的であらゆる人を受け入れられる場所と言える。

Q：図書館を作るのに、（10年近くの）かなり長い時間のかかるわけは？

Dokk1の場合は、場所決めから始めたので時間がかかった。元々大学と連携もあって、大学に近い場所が候補地として考えられていたが、ある地域の開発に関連づけて整備しようということになって、敷地が港湾地区に変わった経緯がある。次に、資金調達が課題であり、国や州への申請などの必要がある。

新しい建物の設計にも時間がかかった。例えば、この図書館の運営システムはよくできていて、本に分類ラベルがついておらず、スマホをかざすとチップが反応して、関連情報を提供してくれる（ビデオ、関連書籍、それらのある場所など・・・）。この開発に相当時間がかかった。また、書籍の分類では「こども」として場所を与えるのではなく、「ファミリー」と括った点が新しい。利用者をファミリーと捉えると、こどもと一緒に訪れる親のことも考え始め、ゾーンのターゲットも内容も変わり、家族も含めた活動や内容を考えることとなる。

そして、それらの相当細かいところまでを市民と一緒に考えたので、時間がかかった。例えば、ハンディキャップのある人に対しては、実際に当事者に試してもらい、意見を聞いたりした。もちろん、技術的なところは、大

学などの専門家が関わっている。

Q：二つ目の新しい事例は？

ヘルシンキに最近できた「Oodi」（ヘルシンキ中央図書館）という、本気で市民参加型で作られた施設である。1階は、北欧という寒い場所なので、普通屋外の広場でやる様々なことを屋内でできるような大空間を設けている（コンサート、映画など）。ミーティング室もある。

2階は、大きなファブラボとなっている。ミシン・木工機械・3Dプリンタなどがあるが、アイロン台がたくさんある。アイロン掛けは家でもできるが、他の人と一緒にできるのが楽しいということだろう。この種の公共施設の役割として一番大事なことで、かつ危惧されていることは、都市では市民が孤独・孤立化することである。孤立化は、心身の健康状態の悪化などに伴う社会保障料の増加など結局は大きな社会コストにつながってしまう。そうなる前に、そうした人々をどのように救うかが検討され、他の人と出会って何か一緒にする場所を設けよう、という趣旨で、こうしたものづくりや家事のための場が設けられた。

そして、3階は10万冊の開架図書館になっている。

こういったプロジェクトだと、かなりの資本が投入され、テクノロジーの実験もできるが、今の時代の特徴は、その時代の「唯一のモデル」があるとは言えなくなっていることである。地域のニーズはそれぞれであり、その地域のニーズを汲みとって、それに合わせた施設をつくる。地域ごとに、ふさわしいモデルが求められる時代になっている。

5. 質 疑

Q 育尾： 運営に関わるいつもの人達は大事だが、それ以外の人々が来づらくなるという問題もある。特に小さな事例だとどうしたらよいか？

A.A.(アンニョリ)： それは、イタリアでも大きな問題である。年配の人のほうが、運営側に立たない人々も社



写真8-1 ヘルシンキ市立中央図書館 Oodi

公式 HP：<https://www.oodihelsinki.fi/en/>

写真はすべて設計者の ALA ARCHITECTS の HP より
(<http://ala.fi/work/helsinki-central-library/>)



写真8-2 ヘルシンキ市立中央図書館 Oodi

公式 HP : <https://www.oodihelsinki.fi/en/>

写真はすべて設計者の ALA ARCHITECTS の HP より
(<http://ala.fi/work/helsinki-central-library/>)

会的に受け入れる素地があると感じる（プログラム化された図書館づくりがなかった頃から、システムを作ってきた人たちだからだろうか）。逆に、そのできあがったシステムの中で育って資格を得てきた40代のほうが、そこから外れることを怖がり、変化や多様な人々の受け入れにあたっての障害になることがある。

しかし、図書館という場所はもう図書館員だけでやっていける場所ではなくなってきているので、マルチファンクションに様々な能力をもった人々が関わっていくべきである。大きな施設（場所）なら、準備段階から多様な人材を揃えていけるが、小さい施設ではそそうした体制づくりは難しい。例えば、小さな図書館同士でネットワークを作って、そのスタッフの能力を共有する場をつくるなどしないとやっていけないはず。

実際問題として、こうした職員の体制づくりは大きな障害になっている。日本の図書館をいくつかみだが、そこでは職員の上下関係がはっきりしていて堅いと感じた。札幌中央図書館では相当がっかりした。上下関係・女性職員と男性職員の関係、図書館員の中の人間関係など、創造的なデザインのためのシステムになっていなかった。これからは職員の役割を分けてしまうのではなく、グーグル社のように隔たりをなくして、一緒に活動をするという体制が良いと考えている。一緒に何かするときのほうが、アイデアが浮かんだりする。そういう働き方を図書館でも作り直す必要がある。

小篠： キーワードとして「参加型デザイン」が出たが、どの範囲の参加型デザインなのか、我々は正しく理解できていないかもしれない。建築設計をするためだけでなく、計画の段階から設計までシームレスに繋げる形で検討を進めることは、日本ではまだポピュラーではない。さらに、運営も含めて、様々なことについて市民が参画して、市民のアイデアを使いながらまとめあげていく取り組みはなかなかできていない。今日はそこが聞いていると思っている（＝プロジェクトオーナー）。

A.A.： 「参加型」というと、今はみなこの言葉を使う。中にはいいことをしたという評判のための、まがい物と言えるような事例も相当数ある。大事なのは、計画の前だけでなく、実際に運営のときにアクティブに市民が参

加・提案・ケアすることである。

市民と一緒にケアしていくようにもっていくのが大事で、その点では小さな施設のほうが可能性があるかもしれない。自分たちの場所だ、という意識を持ってもらうためには、受身だけでなく、市民が関わって、自分たちの手で良い場所にしていくんだ！という意識があるほうがよい。それには、ボランティアなどのような関わり方でもよい。レッチェで私が提案しようとしていたのは、子供のための菜園、家の植木が弱ったら長けた人に相談できる・助けてくれる（植物 SOS）などである。市民が絶えず参加している形、参加することでアクティブに場所を育てる形にまでもっていくべきである。

Q 西野： ヨーロッパのあらゆる公共施設で、「コラボレーション」や「コプロデュース」の重要性が指摘されている。行政にとってはコストダウンという意味もあると思うが、実際にコストダウンには繋がるのか？

A.A.： その観点は、次に「知の広場」を書き直すときには入れたいと思っていることである。イタリアでも、公共サービスを民間委託してコストダウンしようという風潮はある。その場合は受託者が勝手にユーザーを選べる権利が出てくるが、ただ本当のパブリックな場所ならば対象は住民全員とするべきであり、対象者の限定につながる委託は避けるべきで、それは無責任なコストダウンである。

ただ、ボランティアは必要である。そこに職員として働いている人だけで、多様な活動の全てはできない。その点、ボランティアは素晴らしい職能をもたらす。同時に、ボランティアがいることで行政にある水準のクオリティを保つべきだというプレッシャーとなる。

いずれにせよ、図書館を含め、公共施設は本来は行政が責任を持ってお金をかけるべき場所である。もちろん、ものすごく過疎の街なら、ボランティアで運営せざるをえないが。

Q 西野： ロンドンの「アイデアストア」をみて感動したが、そこでは移民への社会的教育が重視されていた。ボローニャサラボルサでは、移民の社会的インクルージョン・インテグレーションについての意識は必要なかった

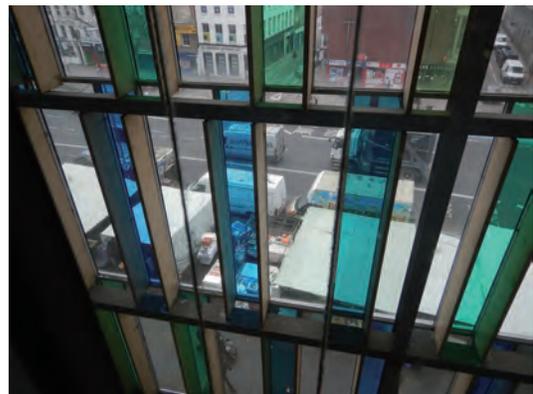


写真 9-1 アイデア・ストア ホワイトチャペル

公式 HP : <http://www.ideastore.co.uk>

(写真はすべて筆者)

のか？

A.A.：「アイデアストア」は移民（バングラデシュ人中心）の割合がとても大きい地域にある。ヨーロッパの中でも平均収入が最低レベルで、図書館に行くことはほとんどない、という人達を対象として、本気で呼びこむつもりでの取り組みである。特に、立地がとても大切で、最初のホワイトチャペルは駅までの間にマーケットがある。学校やマーケットの近くで、日常的な用事の動線に沿って簡単に行けるようにしておくことが重要で、そうすればイスラム系の女性（一番弱い存在。自由な社会活動が家庭内の権力勾配によって強く制限されており、インテグレーションから排除される）でも、買物や子どもの送迎などのついでに行って、英語の講座を受けたりできる。家庭の中でも辛い立場にある彼女たちが、夫に隠れて図書館を利用するためには、無理しないで立寄ることができる、特別でない場所が重要である。



一方、ボローニャとロンドンでは環境がだいぶ異なっており、サラボルサ図書館を作った当時は、あまり移民への対応というプレッシャーはなかった。では、サラボルサ図書館で働く職員はそこまで複雑な問題に対応できるだろうか？ 1つのエピソードを披露する。



サラボルサ図書館は誰でも入れる場所であり、開架図書室にコルビュジェのイスを置いていた。そこを、ホームレスの人がよく占拠していたが、ニオイもあり、他の利用者から苦情が出始めた。そのとき、図書館員にはメディエーターのスキルがなかったので、プロを呼んで助けを請うた。どうしたかという、利用制限はもちろん公共施設としてNGで、ホームレスの人と一般の人双方に呼びかけてクリアした。その際に示した面白い写真がある。2つの隣り合うイスの一つには寝ているホームレスの人（図書館なので、せめて本は持っていてくれというルールでマンガを抱えている）、もう一つには寝ている若い女子学生が居る。どちらにこの場所を使う権利があるだろうか？ どちらとは言えないはずで、それを市民に問うためによく使っている。



写真 9-2 アイデア・ストア ホワイトチャペル

公式 HP : <http://www.ideastore.co.uk>

(写真はすべて筆者)

ただ、図書館員はそういった、多様な人々の滞在の場となるということにネガティブに反応してしまい、今はそういう居やすいイスを撤去してしまったらしい。残念なことである。ロンドンの図書館員には、そういうこと

はやってはいけないという感覚が染みついていると思う。

Q 土田： 都市全体の大きな計画があって、その中の部分である地域に対して、図書館という施設を利用して地域への波及効果を狙うという位置づけの理解でよいか？

A.A.： 都市全体の計画をしていた時代はあったが、その際に図書館は入っていなかった。そのうち、都市計画もキチンと行われなくなり、テリトリーを守る・歴史を活かすという程度である。

一方、都市再開発の結果、高級化してしまい、低所得者が住めない都市になってきている（ジェンティリフィケーション）という問題がある。ボローニャは有名な大学都市なのに学生人口が激減し、遠くから電車を通ってくる。

都市の旧市街地と郊外では、取り組み方が違って来る。それをどこから考えるのかは難しい。郊外を考え直したとき、図書館を考える機会がまた出てきた。1970年代には図書館を含めた都市計画を考える時期もあった。

サラボルサ図書館も、ボローニャにある図書館のひとつでしかない。ボローニャの図書館のなかには、役割を果たしている図書館も、そうでない図書館もある。ボローニャはまちとしてだいぶ大きく発展し（高速鉄道・飛行場・観光）、都市が変化してきた。市民にどうサービスを提供すべきか、まだよく考えられていない部分があるが、一番具合の悪いところから手をつけざるをえない。

トリノの地区の家は、都市のボイドになった場所にまず手をつけた。公共というよりは、下からの力がいろいろな取り組みを起こしつつあり、民間の人達が自力でまちをよくしようとしている。ただ、ボローニャでは、そのような大きい視野のプロジェクトが動いているとは言えない。

土田： シビリアンニーズとパブリックイシューは異なる。都市計画はそこをコントロールする機能を持っている。単純な地域エゴイズムとのバランスをどう取るか、ニーズで参加型もいいが、パブリックイシューとしてランクアップさせないと予算が確保できない、という問題もある。

小篠： それが、都市圏周辺エリア（ペリフィリエ）を



写真 10-1 チニゼット・バルサモ市立図書館

公式 Facebook : <https://www.facebook.com/ilpertini/>

写真はすべて公式 Facebook より



写真 10-2 チニゼット・バルサモ市立図書館

公式 Facebook : <https://www.facebook.com/ilpertini/>

写真はすべて公式 Facebook より

どう人口再構成するかという問題で、ミラノ郊外のまちでは、チニゼット・バルサモという元小学校を図書館に改修してまちの核としていく取り組みもやっている。

土田： ミラノ圏域をどう再編するかという計画はあるはず、交通（トラム）の問題も含めて。

A.A.： チニゼット・バルサモは、田畑だったところが工場になり、南イタリアの移民が入ってきた。だが、産業が衰退してしまい、アイデンティティを作り直す必要があった。そこで、まちのセンターに広場がなかったのが、核として写真博物館を作った。ジャン・ヌーベル設計の広場は酷いが、図書館がいい感じになっている。

A.A. - Q.： 逆に皆さんに質問したい。伊東豊雄氏設計で「せんだいメディアテーク」と「多摩美術大学図書館」があるが、今でもああいった図書館を建てる意味があるか？

山田： 文化・社会的に不利な境遇にある人々を含めて市民を広く対象にした社会的な場所として、サラボルサ図書館を含む公共施設を捉えていると理解している。図書館はそのひとつの例で、それらは例えばシアターや地域に開かれた学校・大学・地区の家などでもよく、そうした日常的な居場所、兼社会的包摂の場は、図書館に限ることはもはやないかもしれない。図書館をつくる「必要」（図書館でなければならない理由）はないが、選択肢のひとつだと思う。

小篠： 多摩美術大学図書館（1階の半分は通り抜けの室内広場が挿入）をどういう風に評価するか、を知りたがっている、と思う。

A.A.： ツタヤ図書館にもインタビューに行った。自分は、あれには反対の立場である。ただイタリアでも、元々ある図書を貸すだけの場所はなくなっていくだろう。

建築の特徴もあるだろうが、スター建築家時代の伊東氏がつくった2つの事例のうち、私は仙台のほうがよいと思う。まちの本当の役割なら、いくらでも人々を入れたほうが望ましいが、図書館は学生対象だから、そのような運用は大学としては受け入れられないだろう。また、居場所となる建物は、そこに住んでいる人に似つかわし

い建物なら望ましいだろう。

小篠： 伊東氏も東日本大震災以降に「みんなの家」をつくって、そこから変わった。

A.A.： 「みんなの家」は伊東氏と一緒に訪れたが、あれはとても好きだ。その理由は、あの事例が、建築家が自分のデザインをつくったものではなくて、その仮設住宅に住む人がほしいものを形にした、参加型のプロジェクトだからである。伊東氏も、「みんなの家」については自分のデザインの話はせず、人の話をする。宮城野地区では、大きなテーブルがあるが、それは復興のことを皆で考える場所がほしいという希望があったためにつくったそうだ。図書館も、住んでいる人の未来を考える場所になるといい。

A.A.： 「ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス」という NY 市立図書館を描いた映画があって、そのなかでとてもいいなと思ったのは、貧しい人々に1年間モデルを無料で貸し出す活動である。そうすると、貧しい人々は今までたどり着けなかった情報を得られる。とても民主的な取り組みであり、図書館はそういった働きをもつべきである。そこには、職業安定所のような場所もあって、そこではどうやって仕事を探すか・仕事に向き合うかを教えてくれる。また、ネクタイとジャケットを貸してくれる（キチンとした格好で仕事にいったほうがよいだろう）。

Q.： またここで質問をしたい。本ではなく、物や道具を貸してくれる図書館がある。そこでは、減多に使わないけど、必要な時にないと困るものを貸してくれる。年に1度くらいで買うほどのこともないもので、みなさんなら、どんなものが貸してもらえるといいか？

- ・おもちゃ。こどもが何が気に入るかわからないので。
- ・雪かきスコップ（使う日はみな同じなのが問題だね）

A.A.： 一番の人気は、ドリル（工具）だそうです。

- ・なるほど、海外に赴任したとき最初に、イケアの家具を組み立てるのにドライバーが必要だった。



写真 11 映画『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』

公式サイト：<http://moviola.jp/nypl/>

チラシは同映画の公式 Facebook より

(https://www.facebook.com/pg/wisemanjp/photos/?ref=page_internal)

・家のメンテのための脚立も役に立つ。

A.A.: 私には94才の母がいて、私がいれば手助けが必要なときにはサポートができるので、母はタブレットで新聞も読めるが、もし1人だったらそういったインターネットや情報のある環境から完全に切り離されてしまうだろう。お年寄りにはインターネットカフェには行かないだろうが、図書館にインターネットができる場所があって、助けてくれる人がいれば、タブレットを使うこともあるだろう。

日本でも、1日中、居心地が良く、1円も消費しないで居られる場所って、ほとんどないでしょう。そういう場所を考えてほしい。そういう場所を作りたい。

貴重なお話を、ありがとうございました。

